カリヨン

CARILLON

日本赤十字秋田看護大学　日本赤十字秋田短期大学

P2-5・・・ 1年間を振り返って
～イベント・活動報告～

特集 スタートから11年
P6-15・・・『防災』を伝え続ける
・及川真一先生が本学で行う防災教育の目的
・防災キャンプの始まりと経緯
・防災キャンプの様子
・赤十字ボランティアステーション

P16・・・・・ CARILLON INFORMATION

２０２１年度　No.11

学報

○カリヨンとは（フランス語：Carillon）
教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16 世紀以来、特にフランドル地方（現フランス領）で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を３つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成８年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨン祭」と呼んでいる。

過去の防災キャンプの様子～県外から本学へ来た学生たち～（P12）

イベント・活動報告！

1年間を振り返って

入学式

4月6日

4月6日(火)午前10時より、令和3年度の入学式が本学体育館において行われました。新型コロナウイルス感染防止のため、出席者は入学生及び教職員のみとなりましたが、新生活への期待と不安を胸に新入生たちは、「生きるを支える人になる」一歩を踏み出しました。

4月9日

新入生交流会

4月9日（金）に対面式と遠隔式を融合した新入生交流会を開催しました。これからの学生生活を楽しく過ごすために、友人や先輩、教員と交流しました。参加者からは、「先輩に直接いろいろ聞けて安心した」、「赤十字についてもっと知りたい」との声が聞こえてきました。学校や赤十字についてはもちろん、学友会やサークルのことも知り、学生生活のイメージが膨らんだようでした。

7月18日

夏のオープンキャンパス

7月18日（日）、今年度1回目の開催となる夏のオープンキャンパスを開催しました。看護大学と短期大学を合わせて約130名の方々にご来場いただきました。「先輩と話そうコーナー」や「先輩学生によるキャンパスツアー」など参加者と先輩学生が触れあう時間が多くあり、たいへん好評でした。その他、全体説明会での入試説明、模擬講義、教職員による相談コーナーなどの多数のイベントを行いました。

11月3日

スポーツ・フェスティバル

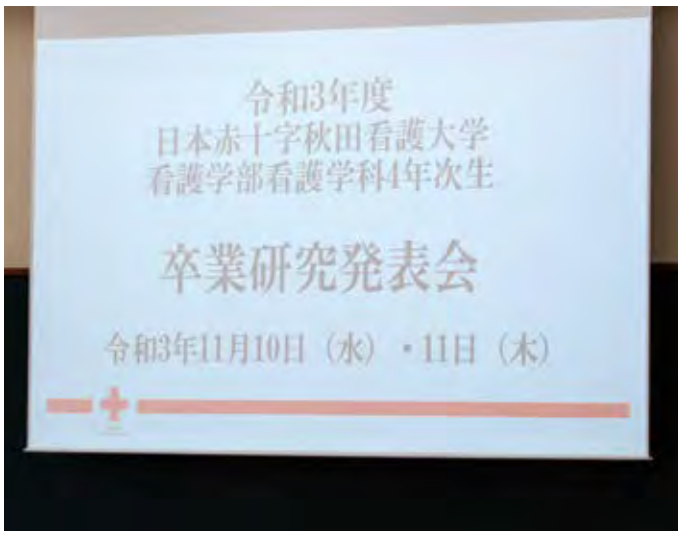
11月3日（水）文化の日にスポーツフェスティバルを開催しました。スポーツフェスティバルを通して健康増進と体力向上を図り、学生同士の交流を深め積極性と協調性を養うことを目的に実施しました。バレーボールとバスケットボールの2種目を行い、学生たちは久々の行事を満喫していました。

11月9日

地域包括シンポジウム

11月9日（火）に本学を会場に、看護大学・短期大学合同イベント「地域包括シンポジウム」を開催しました。このイベントは、高齢化が進行する秋田県において将来、地域医療・福祉に携わる専門職となる学生に対し、毎年開催しています。国が構想する地域包括ケアに携わる各分野の専門職となるにあたり必要な能力、および自己課題について気付く機会とすることを目的としており、看護学部看護学科2年生および介護福祉学科2年生が参加しました。

※スポーツ・フェスティバルは、感染対策を行なった上で開催しています。



11月10日・11日

看護学部卒業研究発表

11月10日（水）、11日（木）の2日に分けて、看護学部4年生が「卒業研究I」の発表会を行いました。学生たちは、それぞれの研究テーマについて、先行研究を検討し、自己の研究目的を設定した上で、研究目的に適した研究デザイン、研究方法などについてまとめあげ、堂々と発表しました。

12月9日

看護学部
合同病院就職説明会

12月9日（木）に、看護学部の学生を対象とした看護学部の合同病院就職説明会を行いました。今回は、秋田県内にある12の病院からご参加いただきました。看護学部の卒業生も、病院で働く「看護師」として説明会に参加し、後輩たちに熱心に話をしていました。

特集

スタートから11年

『防災』を

東日本大震災をきっかけに、アウトドア活動のノウハウを活かして災害時に備えることの大切さを伝える活動を行っている及川真一先生にインタビュー。

伝え続ける

赤十字防災ボランティアステーション リーダー
介護福祉学科 講師
及川 真一 先生

※撮影時のみ、マスクを外しています。

スタートから11年

『防災』を伝え続ける

震災直後に秋田へ。無我夢中で走り抜けた11年

震災時、目で見て経験したことを伝えたい

―― 及川先生が防災についての取り組みを始めて11年目を迎えますね。どんな思いで取り組まれてきましたか？

たくさんの方に防災の大切さを知ってもらいたいということだけを考えて取り組んでいたら、気が付けば11年目になっていました。あっという間でしたが、いろいろなことがありました。

きっかけは、東日本大震災から5か月後の2011年8月に、子どもたちが海に親しむイベント「子どもサマーキャンプ」を秋田で開催したことです。秋田は、東北のなかでも震災の影響が比較的少なかったにもかかわらず、子どもたちを含めた地域の方々が、海を避けているのではないかと感じることが多かったんです。当時は、津波の被害のことがたくさん報道されていたので無理もないですよね。でも子どもたちには、海は怖いという気持ちを持ったままではなく、「海とともに生きるために海から逃げてほしくない」と強く思いました。そのことを伝えたくてイベントを開きました。

―― 最初のイベントは、及川先生が短大に着任して間もないころですよね。イベントを開くのは、大変だったのではないですか？

秋田の人たちの協力がなければ、ここまで来られなかったと思います。

東日本大震災が発生した時、私は地元の宮城県仙台市に住んでいて、震災直後の4月に本学に着任しました。サーフィンが趣味なんですが、当時は自分も海に行くことをためらっていたんです。でも仙台の教え子から「海から逃げないで」と言葉をかけられ、思い切って秋田の海に行きました。サーファーってその土地の人を敬う文化があって、秋田のサーファーに「仙台から来て、ここでお世話になりたい」と挨拶したんです。その時に知り合った秋田のサーファーたちがイベントの開催に協力してくれました。秋田に来て間もない時期で、土地勘もない、知り合いもほとんどいない状況のなか、秋田の人たちの温かさに助けられ、本当にありがたいことだなと思いました。

―― 震災から3年後の2014年に「防災」の考え方を取り入れていますね。

ちょうどそのころ、「まだやっているのか」「復興が進んでるね」といった声が聞かれるようになったんです。地元の仙台は復興への道半ばの状態で、このままでは支援してくださる方が減り、秋田で始めたせっかくの取り組みを続けられなくなると危機感を感じ、アプローチを変える必要があると考えました。

震災発生時、仙台に住んでいた私は、命は助かりましたが、住んでいた地域は変わり果てた景色となってしまいました。そしてライフラインが途絶え、地域の多くの人たちが不自由な生活を余儀なくされました。しかし、これまで経験したことのない絶望のなかにいても、子どもたちが「地域のために自分に出来ることはないか」と率先して行動する姿を目の当たりにしたんです。私はその時、災害時に備えることの大切さや、いざという時に主体的に行動することの大切さを痛感しました。起きてしまったことは仕方がありません。前に進むためには、自分たちで現状打破していくしかないからです。自分が目で見て聞いて経験してきたことを伝えることで、多くの方に防災について考えてもらうきっかけになればと考えたのです。

現在は、本学を会場にして「防災」「キャンプ」「フェス」という3つのテーマを組み合わせた「防災キャンプフェス」を開催しています。キャンプの時の道具を使った食事づくりやテントの設営などを行い、楽しみながら防災について学ぶことができるイベントです。救急法など日本赤十字社のプログラムも盛り込んで、防災について総合的に学ぶことができるような仕組みにしています。

―― 防災キャンプフェスは毎年、数千人もの方々が来場される人気のイベントで

初めて開催したイベントの様子（写真左）秋田の海で知り合った仲間に書いてもらった応援メッセージ（写真右）

アウトドアのノウハウは、災害時にそのまま役立つんです！

及川 真一〇おいかわ しんいち
宮城県仙台市出身。野外教育(自然体験活動)の領域から、自然体験学習と防災の関連性を研究するほか、災害ボランティア育成、自治体、教育関係者を対象に避難所運営指導、地域・学校防災のアドバイザーなどを務める。大学が地域の防災力向上の拠点となることを目指し、住民参加型の防災教育を展開。主に東日本大震災復興支援活動「こどもサマーキャンプ」や年間一万人以上が参加する「アウトドアの楽しさから学ぶ防災講座」などを手掛ける。

すよね。どうしてそんなに人気があるんでしょうか？

最初のころは、一般市民向けの災害防災イベントを開催しても、参加者が数十人だったこともありました。しかも参加者の多くが関係者だったんですよ（笑）。私は数百人くらい来ると本気で思っていたので、たくさんの方に防災の大切さを伝えるためには、まず切り口を変える必要があると考えました。それからさまざまな試行錯誤をして、今の「防災キャンプフェス」のかたちになったんです。

災害時に備えることの大切さを知ってもらうためには、学ぶことを「難しい」と感じるのではなく、「楽しい」と感じてもらうことが大切だと考えています。

そして当たり前ですが、災害は突然起こります。誰にも予測できません。いざという時に「本当に使える防災知識」をみなさんに持っていてもらいたいんです。

震災が起きたとき、キャンプなどのアウトドア活動の経験が、私にはとても役立ちました。キャンプで行うテント張りや野外調理などの方法は、ライフラインが途絶え、家のなかで過ごすことができない状況になった時にそのまま使えるんです。「防災」をキャンプをする時のように「楽しい」と感じてもらうことで、いざという時に思い出していただき、自分や大切な人たちを守っていってほしいと思っています。

過去の防災キャンプフェスの様子

及川先生の研究室には、防災キャンプの時に実際に使っている資料がたくさん掲示されている。「親しみを感じてくれるようで、話に注目してくれるんです」。

―― 楽しそうなイベントですが、かなり大規模な避難訓練としても捉えることができそうですね。

おかげさまで防災キャンプフェスには毎年、2日間の開催で5,000人から8,000人の方々に来場いただいています。本学は地域の避難所として指定されているので、災害時には避難所として開放され、地域住民の方が集まります。本学のグラウンドは4,700人を収容できますが、これは防災キャンプフェスに来られるお客さんの数と同じくらいなんです。イベントを開催することで、避難所の収容人数と同じくらいの人数が一度に集まったら、出入り口や駐車場がどのような状態になるのかということなどを、学生も、私を含めた本学の教職員も把握することができます。もちろんイベントの一番の開催目的は、防災について学んだお客さんが、いざという時のための備えをしていただくことですが、本学にとっても、避難所設備のハード面でも、災害時に主体的に行動できる人材の育成というソフト面でも、とても大きな資源になっていると私は思います。

―― 学生にとっても貴重な経験になりますよね。

そうですね。これだけ実践的な経験をしている学生たちは、私の誇りでもあり

過去の防災キャンプの様子

全国から注目されている「楽しく学べる防災教育」

ます。学生たちとは、イベント開催当日の運営だけでなく、災害の状況設定などのシミレーションや資料づくりなど、準備段階から一緒に行っています。

私は、防災には想像する力が必要だと考えています。想像することで課題を発見します。その課題に対して、どうしたら命を守れるのか、そして備えになるのかを考えます。

またいざという時には、あるものでなんとかしなければいけません。どのように工夫すれば、目の前の困難な状況を乗り切ることができるかを考えて取り組むので、突然の出来事にも対応できるようになります。

過去の防災キャンプの様子

これまで行ってきた活動には、本学の学生だけでなく、県内外の他大学の学生も参加してくれています。北海道や九州から学びに来てくれた学生もいて、その総数は約2,000人にのぼります。全国の学生たちが、活動を通じて学んだ知識や技術を、地元に戻って子どもたちや高齢者、小中高校の教職員、警察、消防などの方々に対して、防災啓発活動を行っていています。本学の防災キャンプが全国に広がっていることがとてもうれしく思います。

―― 防災キャンプフェスだけでなく、県内各地に引っ張りだこですね。及川先生の当初の思いは達成できていますか？

本学で行う防災キャンプや防災キャンプフェスのほかにも、県内の自治体や学校、警察、消防などさまざまな団体から、防災についてのワークショップや講演などを依頼されています。最初の頃は年間で数えるほどでしたが、現在は、県内外からの依頼が増えました。私はどんなに価値のある知識だとしても、たくさんの方に伝えることができなければ、それは価値のないことだと思っているんです。いかに多くの人たちにメッセージを届けられるかをいつも重視しています。取り組みを始めて10年余り、ようやくイメージしていることを形にすることができるようになってきましたね。

―― この２年間、は新型コロナウイルスの感染が拡大しさまざまな影響がでています。及川先生の活動に何か影響はありましたか。

新型コロナウイルスの感染が拡大したことで、各方面からの依頼は少なくなりました。しかし自治体や学校、町内会などから、コロナ渦における避難所の運営方法や家庭のなかでできる対策をお伝えするといった依頼は増えています。特に災害時に避難所となる学校で、教職員や生徒、保護者、地域住民を対象にした参加型の避難訓練や実践的に学べる体験プログラムの需要が高まっています。

これまで学校における防災教育では、年齢や地域に応じて身につけるべき防災知識は何か、どのような内容をどのような順番で教えるべきかといったことが課題となっていました。学校や地域でも広く取り組めるような防災教育のプログラムをこれまで示していたことが結果として現れてきたのだと思います。またコロナ渦における防災啓発の試みとして、新聞、雑誌、Webメディアなどを通じて「防災」について発信しています。公共機関だけでなく、大型ショッピングモールや飲食店など、普段から人が集まる場所で気軽に防災について学ぶことができるように、イラスト付きの解説や親子で学べる防災などの映像制作も行っています。

今年度は、これまでの活動をまとめたドキュメント番組が制作され、全国放送されました。「アウトドア防災」の活動が全国に伝わるといいなと思います。

―― 今後の展望を教えてください。

私には目標やゴールはありません。防災について伝えることに終わりはないと思っています。震災から10年以上が経って、あの日のことを知らない子どもたちも増えてきました。また東日本大震災の記憶が、時間が経過するとともに人々から薄れてしまうのをくい止めるために、私が経験を伝え続けていかなければいけないと考えています。伝えることの重要性は増すばかりです。

災害時に備えることの大切さを一人でも多くの方に知ってもらうために、これからも歩みを進めていきます。

※撮影時のみ、マスクを外しています。

及川真一先生が本学で行う

『防災教育』の目的

大学を拠点とする 地域防災プログラムの展開

自然災害の記憶は、時間が経つにつれ薄れてゆくことは避けられず、防災教育について、広範かつ継続的な取り組みを推進していくことは大きな課題となっています。地震や津波などの甚大な災害を経験した地域、多発する地域、あるいは、今後の切迫性が高い地域などを中心に、積極的かつ先進的な取り組みが行われている。一方で、防災教育の取り組みは地域等によって大きな差異があり、必ずしも熱心な取り組みが行われていない地域等では、防災教育に携わる人材の不足や、活用できる教材などがないといった課題も指摘されています。

防災教育の積極的な推進を図っていくためには、大学や地域において防災教育に携わる人材を育成していくことが極めて重要であり、災害の被害から想定されるように、「防災はこわいもの、暗いもの」という認識を持つ人も少なくありませんが、その印象の転換を図るためには、「楽しく学べる防災教育」の在り方を示すことで、持続的な関心を持たせ、自発的かつ能動的な取り組みを促していくことが極めて重要であり、期待されています。

新しい防災教育の展開 赤十字の資源とキャンプの共通点を活かす

自然の中では人間の力が及ばないことが度々起こります。突然の雨は人の力で止めることができません。雨が降るかもしれないと思うと、人は傘を用意します。災害も同様に当たり前のこと、起きる可能性があるものと捉える必要があります。想定を超える災害が発生した場合、避難行動に繋げられるよう自ら能動的にアクションを起こしていけることが、知識を身に付けること以上に極めて重要です。これらを身に付けるため、主体的に学び、実効性のある行動につなげていくことを目指し、キャンプ活動を通じた防災教育を展開しました。自然災害により、突如として電気、ガスなどが使えなくなった場合に役立ったのは、アウトドア用品と野外活動の経験でした。野外活動のノウハウには、テント張り、野外調理、ロープやナイフを有効に使うなど、ライフラインが機能せず、家の中で過ごせない状況に陥ったときに役立つスキルがあります。災害時でも快適な生活を送る術を学ぼうというのが「防災キャンプ」であり、「知る・気づく・深く読み解く・考える・行動する」ステップを意識した防災プログラムの構築と展開が重要です。

【防災キャンプの始まりと経緯】

及川研究室で行っていた「こどもサマーキャンプ」のプログラムを変更し、現在の「防災」活動に変化しました。この研究活動は、災害ボランティア育成と震災の影響で遊び場を失ったこどもたちを対象に行っていました。

2011
こどもサマーキャンプin秋田

東日本大震災の影響で大自然から遠ざかりつつある秋田のこどもたちを秋田市浜田の桂浜海水浴場に集め、大自然から学ぶ体験プログラムを行いました。こどもたちや保護者の皆さん約250人が参加し、ペットボトルのいかだ作りや地引網などを楽しみました。

2012
こどもサマーキャンプin秋田

「仮設住宅の建設やがれきの山で遊び場のなくなった被災地のこどもたちに、大自然の中で思いっきり遊んで欲しい」。そんな願いを込め、宮城県・岩手県・福島県の各県から 50 名を秋田に招き、海、山、川で秋田のこどもたちと交流を行いました。

2013
こどもサマーキャンプin秋田

「他県から秋田に避難しているこどもたちが生活に馴染めていない」という事実を知り、これまで行ってきた野外教育プログラムのもとで、他県から避難しているこどもたちと秋田県のこどもたちとの交流を図るため、海の家を貸し切ってサマーキャンプを行いました。

【2014年からの防災キャンプ】

年間、数百人の参加者から
1万人以上の参加者に発展しました。

2014
こども防災キャンプ

2014年からは、2011年から実施してきた「こどもサマーキャンプ」に防災教育を組み込むようになりました。大学の体育館やグラウンドに避難所を設営し、火の起こし方、ご飯の炊き方、救急救命、応急処置などを楽しみながら学べるプログラムとしました。

2015 みんなの
赤十字防災サマーキャンプ

日本赤十字社秋田県支部の協力を得て、学生ボランティア50名が防災キャンプで得た知識と経験を活用し、小学生の参加者とともに大規模災害発生時を想定した1泊2日の防災キャンプを行い、楽しみながら身に付く防災教育を行いました。

2016～2019
AKITA防災キャンプフェス

県内の赤十字施設と地元新聞社と連携し、防災キャンプフェス実行委員会を立ち上げ、本学を会場に「防災キャンプフェス」を毎年9月に開催し、来場者数は、2016年約4500人、2017年約8000人、2018年約5000人、2019年約7000人が来場しました。

【過去の防災キャンプの様子】

夏　6月の防災キャンプ

「備え」「救う」「支える」をテーマに防災キャンプを実施しています。災害時に「命を守る行動」や「命を救う行動」など避難所支援活動に関する知識・技術を学びます。この防災キャンプのプログラムは注目され、多くのメディアから取材を受けました。

冬　2月の防災キャンプ

冬期に大規模災害が発生し、電気・ガス・水道のライフラインが断たれた状況を想定し、冬季災害時に役立つアウトドア技術と日本赤十字雪上安全法講習会を実施。雪害に関する知識や応急手当を含めた技術を習得する目的で、毎年2月に開催しています。

赤十字防災
ボランティアステーション

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学における赤十字の災害・防災ボランティア活動に係る教育・研究及びそれに係る赤十字運動の啓蒙を組織的に推進・支援するとともに、災害時等において本学の教育・研究成果を活用して赤十字の理念を実践することで、地域社会との連携による防災力の強化を図ることを目的として設立されました。

●主な活動紹介

①災害時に避難所となる場所で防災教室を開催
小学校、特別支援学校、高等学校などの生徒を対象に、避難所の運営方法を学んでもらう活動をしています。

②受講対象者の特性に最適化した防災教室を開催
女性、親子、子育て中の方、外国人、障害者、高齢者など、対象者の特性に最適化した防災教室を開催しています。

③災害時避難所運営担当者に対する防災教室を開催
秋田県警察本部、秋田県庁、秋田市、秋田県教育委員会、秋田県国際交流協会、秋田県聴力障害者協会など、行政機関や教育機関などに対する防災教室を開催しています。

●台風19号被害に伴う災害ボランティア活動

2019年10月12日～13日に日本列島を通過した台風19号。同時多発的に河川氾濫や大規模冠水、浸水が発生し、それと同時に風による倒木や家屋破損など、各地に甚大な被害をもたらしました。赤十字防災ボランティアステーションでは、宮城県石巻市社会福祉協議会(災害ボランティアセンター)、石巻赤十字病院、石巻赤十字看護専門学校と連携し、10月26日～11月17日に災害ボランティア活動を行ってきました。

「赤十字防災ボランティアステーション」の詳細につきましては公式Webサイトをご覧ください。

https://vs.www.rcakita.ac.jp/ 赤十字防災ボランティアステーション 検索

看護師の皆さんへ

日本赤十字看護大学の大学院で専門看護師を目指しませんか？

受講中から支給が受けられるから、安心して勉強に専念できる！

大学院修士課程 高度実践看護学分野（がん看護・精神看護）は本年2月7日、厚生労働大臣より教育訓練給付「専門実践教育訓練」として指定されました。

- ◯ 高度実践看護学分野（がん看護学）
- ◯ 高度実践看護学分野（精神看護）

「専門実践教育訓練給付」とは

働く方々の主体的な能力開発やキャリア形成を支援し、雇用の安定と就職の促進を図ることを目的として、厚生労働大臣が指定する教育訓練を修了した際に受講費用の一部が支給されるものです。一定の受給要件を満たす方が、厚生労働大臣の指定を受けた教育訓練を受講・修了した場合に、費用の一部が教育訓練給付金として支給されます。

専門実践教育訓練給付金　2年間で最大112万円
受講中 40万円×2年分　修了後 16万円×2年分

【教育訓練給付に関する問い合わせ先】
ハローワーク秋田
電話：018-864-4111（代表）
部門コード 11#　雇用保険給付課
受付時間：8:30～17:15

【出願に関する問い合わせ先】
日本赤十字秋田看護大学大学院　入試・広報課
電話：018-829-3759
FAX：018-829-3030
E-mail：koho@rcakita.ac.jp

※高度実践看護学分野（がん看護学・精神看護）では、本大学院看護学研究科修士課程の出願資格に該当するほか、看護師として3年以上の専門分野の実務経験があることを出願要件としています。

【本学へのご寄付のお願い 】

建学の精神「人道」のもと、すべての学生たちが、この大学で学んで良かったと思える学び舎にしていくために、教職員が心を合わせて、学生支援の取り組みを続けてまいります。本学の取り組みについてご理解をいただき、皆様の暖かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

看護職員の養成

介護福祉士の養成

学修環境の充実

体験学習の充実

防災教育の充実

ご寄付について詳細は、本学公式webサイトをご覧ください。　日本赤十字秋田看護大学　検索

【税制上の優遇措置】
本学へのご寄付は、特定公益増進法人に対する寄付として、所得税の税制上の優遇措置を受けることができます。寄付受領後に、免税に必要な「受領書」などをお送りします。

【問い合わせ先】
事務局 経理課
電話：018-829-3014　FAX：018-829-3030
E-mail：keirika@rcakita.ac.jp

学報「カリヨン」No.11
■発行日／令和4年3月1日　■発行／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学
■編集／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学　入試・広報活動委員会
〒010-1493　秋田市上北手猿田字苗代沢17番地3　TEL.018-829-4000

制作／ノリット・ジャポン株式会社